

# 2024年度(令和6年度)学校評価自己評価表

一ツ橋中学校 中学校区	校番 51	福山市立長浜小学校
最終更新日	2024年(令和6年)4月1日	

## I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

## II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 めざす子ども像の実現に向け、主体的に学ぶ取り組みを着実に進めている。授業では教職員が熱意を持って、工夫をしながら全力で取り組んでいる。学校と地域とが連携した教育活動を共に進めていきたい。	児童生徒の現状 「探究的な学習」の研究を校区で推進している。『子どもの声』から、『本物に触れる』、『机からの脱却』を視点にもった学びづくりにより、児童生徒が自ら探究する姿が見えるようになってきた。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	「学びに向かう力」「課題発見・解決力」「対話する力」「自己・他者理解力」「自己効力感」 自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる力を身に付けている。 小中合同の「自ら考え学ぶ授業」を実践するための研究授業を通して、全ての児童生徒が主体的に学ぶことができる学校をめざす。 探究的な学習の充実に向け、小中で連携して、9年間のカリキュラムを構想するとともに、「子ども主体の課題設定」「机からの脱却」(外部連携を含む)を視点にした取組を行う。
--	---	---	---

## III 自校

ミッション
地域に愛着を持ち、自己を高め、友達とともに伸びていく力を培う

学校教育目標
自ら学び 夢に挑戦

現 状
<p>&lt;児童生徒&gt; 縦割り班での活動や「夢に挑戦」への取組を通して、児童の「自己効力感」や「自己指導力」につながる意識が、向上してきている。特に「夢や目標をもっている」という質問に、肯定的に回答している児童の割合が増えてきている。しかし、日々の友達との関わりの中で、相手にきつい言動をしまったり、お互いに相手の気持ちを考えることができなかつたりするなど、相手意識のある行動や言葉がけが難しい児童もいる。より広い視野で、お互いに分かり合うことができるよう、より細やかな支援が必要である。</p> <p>&lt;授業&gt; 児童が主体的に学びを広げていけるよう、授業改善を進めた結果、「多様な方法で探究することができる」と感じている児童は約85%だった。児童自身が「問い」を見つけ、児童の「知りたい」や「やってみたい」を大切にしたい授業づくりの成果であると言える。今後、より深く学び続ける力を育成していくためには、児童が自分事としてとらえることができる「問い」のある単元づくりを進め、児童に多様な学び方を促し、学びの場を広げていく授業づくりに取り組む必要がある。</p>

育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	学びに向かう力	課題発見・解決力	自己効力感	
めざす子ども像	低学年	目標を決め、自らを振り返りながら取り組む。	友だちの考えをしっかりと聞き、自分の考えをもつ。	友だちと関わり合いながら、自分のいいところに気付く。
	高学年	目標を決め、自らを振り返り、次の学びへとつなげていく。	自ら「問い」を見つけ、自分なりの工夫をしながら課題解決をしていく。	自分の良さ、友達の良さに気づき、自分のやりたいことに挑戦する。
研究	テーマ	児童が「問い」を見つけ、多様な方法で探究していく授業の創造		
	内容等	～「本質的な問い」を意識した単元計画の構想を通して～		
めざす授業の姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童自らが「問い」を見つけ、様々な方法で探究していく授業</li> <li>何のために学ぶのか、児童がどんな力を身に付けるのかを明確にした授業</li> <li>どんなことを学んだのか、どんな力が付いたのかを児童が明確に意識し、分かりやすく表現することができる授業</li> </ul>			

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立長浜小学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)			
							□指標に係る取組状況	力% 達成 評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	力% 達成 評価	総合 評価	改善方策
6	○自ら考え学ぶ授業の推進	★	継続	○児童が「問い」を見つけ、多様な方法で探究していく授業実践	○身の回りの生活や経験と関連付けながら学ぶことができるカリキュラムを編成し、単元づくりを行う。	○「多様な方法で学びを深めたり広げたりすることができた」と感じる児童の割合80%以上 ○学力を伸ばした児童の割合前年度以上							
5	○自己指導能力を育む教育活動の推進		継続	○自己を認識し、自分のよさが分かり、夢や目標を自分で選ぶことができる児童の育成	○「夢に挑戦」の取組を通して、認め合う集団作りを行う。 ○行事ごとに目標を設定し、振り返り、自分でサイクルを回す力をつける。	○「自分には良いところがある」「目標や夢にチャレンジしている」と感じる児童の割合85%以上							
5	○子ども主体の健康・体力づくりの推進		継続	○自分の健康・体力づくりの課題に気づき、自己目標を決めて取り組んだり振り返ったりできる児童の育成	○メディアとの関わりを見つめ直し、自ら改善を進める児童を育成する。 ○体力テストで課題になった項目の改善を図る。	○生活ふり回りカードによる個人目標達成の割合85%以上 ○体力テストで課題になった項目の改善率70%以上							
3	○働き方改革の推進と教育の質の向上		継続	○教職員が元気・笑顔で勤務できる環境の充実	○一人一人の学校経営に対する参画意識の向上を図る。 ○教材研究に専念できる時間を定期的に確保する。	○「仕事にやりがいを感じる」、「子どもが自ら学ぶ授業づくりに充てる時間がある」と肯定的に回答する教職員の割合が、90%以上							

[プロセス評価の評価基準]

[達成評価の評価基準]

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

評点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。